

説教 『不可解な御心へと進む』 山本 護牧師
聖書 イザヤ書 51：20～22／マルコによる福音書 14：32～42

「あなたの主なる神、御自分の民の訴えを取り上げられる主はこう言われる。見よ、よろめかす杯をあなたの手から取り去ろう。わたしの憤りの大杯を、あなたは再び飲むことはない(イザヤ 51:22)」。神の憤りのために民は、酔漢のごとくよろめいている(51:21)。「杯」とは、負うべき己が責任と読めよう。だが神は民への憤り(51:20,22)を忘れ、「よろめかす杯をあなたの手から取り去ろう」と告げた。

「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、私が願うことではなく、御心に適うことが行われますように(マルコ 14:36)」。イエスの祈りが異様な迫力で描かれている(14:33～35)。人間の杯は取り去られるが(イザヤ 51:22)、いかにしてそれが成し遂げられるのか。イエスが私たちの杯を負われる、十字架の犠牲によって。個々の罪は小さく見えても、それらが連鎖すると富や力の奪い合いになる。その結果、引き起こされる戦争や奴隷化の悪は、もう鷹揚に赦される範囲のことではない。イエスはそうした悪の源である「私の杯」を負われる。

イエスはひどく恐れ、死ぬほどの悲しみに陥って祈る(マルコ 14:33～35)。「御心に適うことが行われますように(14:36b)」と祈りながらも御心の奥は不可解で、「他者の杯」を負う意味が分からずに苦しんだ(14:36a)。そして分からずとも「アッパ=父ちゃん」を頼りにする、と決意を新たにされたのではない。「神の子だから十字架にかけられる目的を知っていた」なんてことは絶対がない。普通の人間になるほどの神の謙りを、通俗的な信仰で貶めてはならない。神の子が生身の人間として苦しみ、「できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈った(14:35)」ことを軽くしてはならない。

「苦しみの時」の除去を祈りながら、不可解な御心に従おうと思ひ直し、「時が来た(苦しみの)」。人の子は罪人たちの手に引き渡される(14:41)と言って踏み出した。呻吟するイエスの姿が感じられる程度の距離にいた三人の弟子は(14:33～35)、幾度となく「目を覚ましていなさい」と命じられても三度も眠りこけていた(14:41)。この不甲斐ない弟子に「もうこれでいい」と呼びかけ、「立て、行こう、見よ、わたしを裏切る者が来た(14:42)」と促した。「見よ」とは、「見よ、よろめかす杯をあなたの手から取り去ろう(イザヤ 51:22)」という預言の言葉と関連づけられよう。私たち自身が負うべき杯を「取り去る十字架」を、「立ち上がり、行き」、それを自分の目で「見よ」ということなのだ。

「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われるように(マルコ 14:36b)」という覚悟が、私たちにも起こるだろうか。不可解な御心を頼みにして踏み出せるだろうか。御心は分からなくとも、キリストが杯を負い、「私の祈り」となっておられる真実を、福音書と自らの経験を通して「見る=知る」ことはできよう。私たちは立ち上がり、ペトロのようにおずおずとでもついて行くのだから(14:54)。

十字架は不可解な御心。十字架につけられたキリストは、「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの(1コリント 1:23)」だ。苦しみ葛藤するイエスの祈りも、傍目から見れば「愚かなつまずき」となる。だが民族や文化背景に関係なく、「召された者には、神の力、神の知恵(1:24)」なのだ。



【おまけのひとこと】

ただの人イエス 神はここまで降ってこられた ただの人として葛藤し ただの人として十字架にかかった 客観的には敗北 すべてが灰燼に帰した それからのことは謎 しばらくは沈黙せよ